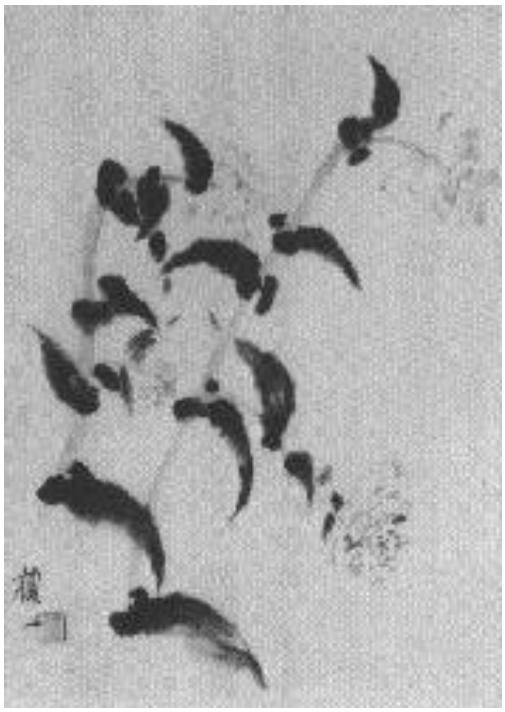
第三章　回想記



誕生

一九六七年（昭和四十二年）五月十三日、若葉のまぶしい五月晴れの日、小さな産声をあげて、あなたは予定より二日遅れはしたものの、元気な姿で私達を喜ばせた。体重は三千二百二十グラムでした。

あなたは父母、祖父母の祝福を受け、私達の計り知れない愛情の中で、我が家の長男として大切に育てられました。佐渡の美しい自然と、人情味豊かな島国で、素直で明るく、ひょうきんな子に育っていったのです。

昭和四十二年は、日本の人口が一億の大台を突破し、美濃部革新都政が誕生した年でもありました。又新潟県では、上越線複線化完成、県民会館開設の年でもありました。

翌年の昭和四十三年、あなたが一歳の時、作家の川端康成が、日本初のノーベ

ル文学賞を受賞、今も謎の三億円事件、メキシコ五輪とついこの間のように思い出されます。

幼かりし頃

二、三歳頃、アパートの一室で、あなたがミニカーの底の小さな穴に、ドライバーを差し込み分解している姿を見て、びっくりした事がありました。

「この子は将来、工学部系の道を進むのだろうか」と思いながら、障子の穴からじっと見詰めていました。今にして思えば、この頃からすでに車を愛し、ラリーの道を夢見ていたのではないでしょうか。

あなたは本当に車が好きでした。しかし小さい時は、ミニカーで満足していたあなたも、ラジコンで車を操り、次には十八歳で免許を取り、車を運転するまでになってしまいました。これが死への道につながろうとは……。

又こんな時もありました。カッパえびせんに応募して三回もミニカーが当たった時、「洋行って運がいいね」って二人で笑ったあの頃の事が思い出されます。

又、新潟遊園でのチューリップ祭の時、ウルトラマンの輪の中に入り、悪い怪獣をやっつける場面に選ばれて、嬉しそうだったあなたの顔が目に浮かびます。

廊下の隅に置かれた、シールがいっぱいはってある整理箪笥にも、あなたの思い出がいっぱい詰まっていました。

あなたが二歳の時、宇宙時代の幕明けの年として、人間宇宙船ソユーズ号のドッキングと飛行士の乗り換えに成功したのに続き、アメリカの宇宙船アポロ11号が、月面着陸に成功し、世界中の人々を驚かせました。

歌では、『黒ネコのタンゴ』が流行し、あなたもレコードに合わせて、よく歌っていたのに……。

初めての旅行

昭和四十五年の四月、あなたが満三歳の誕生日を迎える一ヵ月前に、九州のおじいちゃんの家へ出掛けた時、羽田空港では、重苦しい空気が漂っていました。ハイジャックされたよど号を目前に、私達は厳しい警戒の中を、ＹＳ－１１機に乗り込みました。機内であなたは、スチュワーデスから戴いた飴を口にほおばりながら、通路を行ったり来たりしていたあの姿が、今でも鮮やかに私の記憶に残っています。

日南海岸、洗濯岩、高崎山と楽しんだ私達は、ボーイング727で新大阪に着き、万博を楽しんで我が家に帰ってきました。その万博の太陽の塔の下で写したあなたと私の写真が、今はただ悲しい。その塔の下に、あなたは幸運にも二度立つことが出来ました。それは南高校が甲子園行きのキップを手にした時、応援者の一

人として甲子園に行き、友人と一緒に太陽の塔の下で撮った写真、それは十七歳の洋行でした。

妹と共に

昭和四十六年四月、あなたは海星幼稚園に入園、沢山の友達の中で、色々な経験をし、カトリック教の教えも少しずつ身に付け、明るく元気な子に成長していきました。

その年の十二月三十日には、あなたの妹が誕生、四つ違いの妹とは喧嘩することのなかった兄妹であったのに……。仲の良い兄妹であったからこそ、千鶴の大粒の涙が痛々しい。

あなたと千鶴は、顔も似てなく、性格も違っていました。あなたは私に、千鶴はお父さんに似ていました。あなたは、持ち前の明るさで我が家に笑いを運んで

来てくれていたのに。

転勤

昭和四十八年三月、私達は転勤の為、私の故郷佐渡を後にし、西蒲原郡黒崎町大野に借家住まいをすることになりました。千鶴一歳、洋行五歳の時でした。知らない土地での不安な生活の中で、隣人の温かい心に支えられ、その年の五月からあなたは有明幼稚園に通園する事になりました。

そうそう、この有明幼稚園の通園は、あなたの好きな幼稚園送迎用のバスで、片道三十分位、揺られて往復しなければなりませんでした。車が大好きなあなたにとって、毎日の通園は楽しかったようですね。

昭和四十七年は、田中角栄が庶民宰相の椅子に座り、一方、グアム島のジャングルに二十八年間隠れていた横井庄一軍曹が発見された年であり、翌年にはオイ

ルショックとなり物不足という状況がクローズアップされた年でもありました。

大野小学校での二年間

昭和四十九年四月、あなたは大野小学校に入学。その時の一年、二年の担任が樋口先生でした。ピカピカのランドセルに、淡いグレーのスーツそして赤い蝶ネクタイ、十五年前の入学式の写真。こんなにも幸せな時があったのに。

持ち前の明るさで友達も多く、毎日の様に友達が遊びに来てくれあなたはざりがに取りや、缶蹴り遊び、キャッチボールと外で元気に走り回っていました。特に大久保君とは大の仲良しで、あなたが転校して再び、南高校で彼と再会したのも何かの縁だったのでしょう。その彼がお線香をあげに来てくれた時、あなたの幼かりし頃が思い出されて苦しくなりました。

又、自由研究であなたは〝カップラーメンの空き箱利用〟を発表し、秋のジュ

ニア展では、版画で入選しました。風雨の激しい中を、家族四人で展示場へ見に出掛けた時の事が、今もはっきり記憶の中にあります。

もう一度あの頃のように、家族四人になれたならば、どんなに幸せでしょうか。

昭和四十九年と言えば、長嶋選手現役引退、ルバング島から救出された小野田元陸軍少尉、昭和五十年に、エリザベス女王来日、沖縄海洋博覧会、その時あなたは、まだあどけない八歳であったのか。つい昨日のように思えるのに……。

曽野木小学校時代

昭和五十一年三月、曽野木小学校に転校したのは、あなたが小学三年の時でした。

人懐っこいあなたは、この学校にもすぐ馴れて、家の前の原っぱで、黄色い声を張り上げて野球を楽しんでいましたね。窓越しに目を細めて眺めていたあの頃

の私に比べ、今の私は何よりも大切な我が子を失い、極限の悲しみのど真ん中に立たされています。

世はまさに無常です。しかし、この原っぱだけは、あの頃と同じく子供達の遊び場になっています。

私が、この曽野木に永住を決めた第一条件は、何よりも学校に近く交通事故の心配が無いという事でした。

三年の秋、あなたは中学校の給食室の絵を繊細なタッチで上手にまとめ上げ、ジュニア展に、「入選すると思ったのに、佳作で残念ね」と言われた程、上手に書いてあった。佳作であったからこそ、あなたの作品は戻ってきてくれたのでした。

気に入っていたこの絵を、私は早速額に入れ玄関に飾りました。絵のお好きな方が、誉めてくれると、ついその気になって目尻が下がる思いでした。あなたの残したこの絵は、玄関の壁に掛けられて、訪問者の心を和ましてくれる事でしょう。

絵の中に描かれている三羽の鳥は、あの告別式の時、大空高く舞い上がった数羽の白いハトのうちの、三羽であったのでしょうか。

昭和五十一年は、ロッキード事件で明け暮れた年であり、モントリオール五輪、五つ子の誕生、スクスク成長した五つ子ちゃんも、もう中学生、時の経つのは早いものであり命の強さに感動し、又反面、命の脆さに涙がこぼれました。五十二年は、王選手が七五六号で世界のホームラン王になり、王フィーバーに酔いしれた年でもありました。新潟―佐渡間にジェットフォイルが就航し、その年のあなたの自由研究は、〝ジェットフォイルについて〟でした。自ら乗船したり、資料集めに走り回ったりしていたのに。

五年の後期、あなたは副会長として、少年自然の家では入館の挨拶、翌年の入学式には、生徒会代表の挨拶と頑張っていました。まだあの頃、私の背丈を追い越してなかったあなたは、

「お母さん、挨拶の練習するから聞いてて、間違えたら言ってね」

と何度も声を出して練習していた、あの真剣な顔が忘れられません。

又六年の三学期に、あなたは学校の階段の手摺りを、ハードルのつもりで飛びこそうとして失敗。救急車で運ばれる中「頭を打ってなければよいが」と私は神に祈っていました。精密検査の結果、右手首骨折以外異常なく、ホッとしたものでした。

右手のギブスが痛々しかったが、左利きであったことが不幸中の幸いでした。手にむくみがきて痛がっていたことや、手にビニール袋を被せてお風呂に入り、背中を流してあげたこと、長い間、病院通いをしたあの頃、思い出せば色々ありました。

卒業式の前日にギブスが外れ、金ボタンの学生服に身を包んだあなたは、晴れて卒業証書を手にした。嬉し涙の中で私はあなたの未来に幸多かれと祈った筈なのに……。卒業祝いのラジカセが、今はあなたの仏前で私の涙を誘うばかりです。

昭和五十四年は、国公立大学で初の共通一次入試を実施した年です。あなたは

八回目の昭和六十一年にこの入試に挑戦、それからの月日は、水に浮かんだ花びらの如く儚く消え去ってしまいました。

中学生時代

中学生になり、心身共に成長し、何時の間にか私の背丈を追い越してしまった。危険から守ってあげるには、あまりにも大きくなりすぎて、あなたは私の手から少しずつ羽ばたいていったのでした。

中学一年の時、卓球部員として部活動に励み、個人戦でベスト８入り。そして二年、先輩引退後は部長になれると喜んでいたのに、尿検査で潜血がみられ、精密検査の為、夏休みを利用して吉田病院に一週間入院。

健康であったあなたが、初めての検査入院、私も泊まり込みの一週間でした。窓からは自然がまだたっぷり残っている吉田の風景が眺められ、時折り遠方に見

え隠れして、越後線の電車が走っているのが見えました。

入院生活の中で、好き嫌いの多かったあなたは、一週間の病院食には大分まいったようでした。病院前に、こぢんまりしたコシヒカリのおにぎり屋さんがあり、タラコ、鮭のおにぎりを買いに走ったものです。あなたと二人で赤いサルビアの咲いていた中庭を眺めながら、仲良く病院食や、おにぎりを分けあって食べたあの日が懐かしい。退院の日、まぶしい太陽の下で何と空気が美味しく感じられたことでしょう。

その後、体育はストップされ、卓球への未練と戦いながらも、あなたはその分、副会長として生徒会活動に力を注いだようです。生徒会新聞〝信濃川〟に、後期の抱負、三年生への激励の言葉が掲載されていた半ば黄味がかった新聞が見つかりました。これも又、あなたの思いでの一つとして大切に取って置くことにします。

ゴルフのクラブで

小学生の頃、寝付きの悪いあなたは、よく、布団の中で、
「眠れない眠れない」と言って私を困らせたものでした。
「寝よう、寝ようと思うから眠れないのよ。無理に寝ようと思わないでいたら」
「そんな簡単なことお母さんいって……」
「羊の数、数えたら」
「羊が一匹、二匹、三匹……」
ところが中学に入学した頃から、眠くて眠くて、眠り病にかかった様に変わってきました。日記に書かれていたように、毎日睡魔との戦いでした。
私にとっては、朝あなたを起こすのが一仕事であり、そう簡単には起きてくれませんでした。階段を何度もかけ上り、かけ降り、そこでひらめいたのがゴルフ

のクラブでした。あなたの部屋は、居間の丁度真上にあったので、二度起こしても起きない時は、下からゴルフのクラブでつつく事にしました。あなたも足で〝ドンドン〟と起きたサインを送ってきましたね。

南高校へ

受験の年、あなたは迷わず南高校に決めていた。小さい時から何故かこの高校で、卓球をすることが夢だったようですね。

受験発表の日は、三月というのに雪のちらつく寒い日でした。白いコートを着て出かけたあなたの後姿を見送り、私は電話のそばにくぎづけになっていました。そして、合格の嬉しい知らせ、あの時の感動は今だに忘れることが出来ません。夕方のテレビに偶然に友人と喜びあっているあなたの姿が写り、再度合格の喜びを分ち合ったのが、ついこの間のように思えます。この時の入学祝いがシンセサ

イザーでした。

あなたはその頃、イエローマジックオーケストラが大好きで、細野晴臣、坂本龍一、高橋幸宏に熱中していました。音楽は苦手だと思っていたあなたが、シンセサイザーに首ったけになり、色々な本を買い集め、上手に弾いていた姿が目に浮かび胸が詰まります。そのシンセサイザーも主人を失い、淋しそうに仏前であなたの遺影に涙を流しているように思えます。

あの頃、あなたはアマチュアバンドを作りたいと言っていました。自動車部に入らず、こちらの道を進んでいてくれたら……。

高校時代

昭和五十六年は夢の宇宙船、スペースシャトル打ち上げに成功、そして、五十七年は待望の上越新幹線開通、翌年東京ディズニーランド開園、又全国のお茶の

間に「おしん」旋風が起こった年でした。その時あなたは高校一年生でした。

高校二年は、あなたの短い人生に於いて素晴しく有意義な年でした。水芭蕉の美しい尾瀬のハイキング中に、南高校は新潟県代表の甲子園行きのキップを手にし興奮の渦に沸いた。あなたは勿論、応援者の一人として甲子園行きのバスに乗り込んだのでした。

炎天下での声援に、京都西高校、明徳義塾戦と勝ち進み、遂にベスト8、県勢として五十八年ぶりの快挙であり、新潟県人を沸き上がらせたものです。あの時の感動は、あなたの胸中に青書の一ページとして深く刻み込まれたことでしょう。

この年の秋、あなたは教育番組の『Ｙｏｕ』に出演。タイトルは「通学路の秘かな楽しみ」でした。数々の思い出を短かった二十一年間の人生に縮図の如くまとめあげ、その思い出を私達家族に残していってくれたとは……。

又この頃、あなたは素晴しい友人を私に紹介してくれました、上越教育大を目差していたまじめで学生らしい知的な人でした。学習面や、家庭の事、或は私的

な悩みなど相談しあう良き友人であり、二人の目標は、国立大学でした。

あなたが高校三年で千鶴が中学二年の三学期頃、千鶴が体調を崩し、病院通いが始まった。私の全神経が千鶴の体に注がれて、あなたの大学受験はあなたに任せられていました。

昭和六十一年度は、私立の東海大と国立の長岡技科大の二校を受験し、東海大は夜遅く発表されたテレビで合格を知り、家族四人で喜び合いました。

上越教育大の発表の時は友人と二人で見に出かけたが、残念ながら桜の花を咲かせることが出来ませんでした。数日後の長岡技科大の発表の日、ガンセンターで点滴を受けていた千鶴のそばで、私は落ち着かない気持ちであなたのことを安じていました。しかし、友人の時と同じ様に、あなたは自分の名前を見つけることが出来ませんでした。そんな時、あなたには心を癒してくれる友人がいたから私は安心していました。

二人は、お互いに励まし合い、一浪しても希望校にと強い信念で予備校に進路

を決定しました。今思えば、私達家族とあなたが、一年間でも多く一緒に暮らせる為の予備校時代ではなかったのでしょうか。

昭和五十九年は、かい人21面相による〝グリコ及び森永事件〟ロス五輪開催そして、エリマキトカゲ等〝動物タレント〟が大活躍した年でもあった。新潟駅南にプラーカ新潟が誕生し、新県庁舎が落成したのはあなたが高校三年の昭和六十年でした。

学生服

私が一番好きだった思い出の中のあなたは、学生服を身に着け、黄色い自転車で通学していた時の姿でした。

髪を軽くドライヤーで形をつけ、何処となく愁いを含んだあの顔は、年頃の青年の私の大好きな顔でした。底抜けに明るいあの笑顔の中に、ちょっと見え隠れ

するあの甘酸っぱい目が魅力的でした。

初めて学生服を着た小学校の卒業式では、まるで服が歩いている様に見えたのに、何時の間にか学生服を粋に着こなせる様になっていました。色白の肌に黒の詰め襟が似合ったのかも知れません。

又シャンプー後は、私の化粧箱の鏡の前で、ドライヤーを上手に使って髪型を整えていたあの時の姿が目に浮かびます。

そうそう、こんな事もあったっけ。時々私は、あなたの注文に応じて前髪と耳元の髪を耳につかえない程度に切ってあげたことがありました。首にタオルを巻き、その上から風呂敷を肩にかけて、母さん床屋の始まりでした。

そんな思い出も、つい昨日のように思えます、遺影の前に私の好きな数枚の写真を飾りました。その中の一枚は、いうまでもなく、ちょっとすました学生服姿のあなたであった。

物真似

小さい頃から、物真似を得意としたあなたは、南高校時代、帰宅するとよく国語の先生の物真似を得意そうにしてみせてくれたことがありました。

そういえば、本を読めば知らずに主人公に成り済まし、幻想的な気分になっていた様に、物真似をすればすでに自分が国語の先生に成りきっていたのでしょう。

一見、恥ずかしがりやのはにかみやに見えるあなたの、面白い一面でもありました。

また、〝夜のヒットスタジオ〟の吉村真理の物真似も得意として「どうも、吉村真理です」で私達を笑わせたり、関根勤の「僕、三っつなの」等は最も得意としたものでした。デーモンの「アハハハ、デーモンだあ」も今は懐かしく思い出されます。

逆縁の悲しみから半年経った今でさえ、今だに洋行の死が信じられないのは、

こんなにも鮮やかに私達の心の中に生き続けているからでしょう。又何時か、ひょっこり帰ってきてこんどはだれの物真似を演じてくれるのかしら……。

薄ピンクのこぶしの花が咲く頃か、あの純白の利休梅が我が家の庭を彩る頃か、それとも記念樹の桜の花が咲く頃に帰って来てくれるのであろうか。

或るアイデア

或る朝、私は主人の背広の裾に一枚の紙切れが洗濯バサミで留められていたのを見つけました。

「何だろう？」

「あら、すごいアイデアだこと。さすが洋行だわ、ふふふ……」

一枚の紙切れにイラスト付きで、こんなふうに書かれていた。

請求書

我が家の大蔵大臣である父上殿

参考書代〇〇〇円

文庫本代△△△円

靴代　×××円

以上お願いします

金欠病の洋行より

このアイデアには私もさすが「やったね」と感心したものでした。男の子のユニークな発想は、女である娘からは得られなかったものであり、今迄、幾度かそういう男の子独特の発想に驚いてきました。これに成功したあなたは、時々この手を使うようになっていました。それからというもの、朝起きるとつい背広に目がいく私でした。

背広に留められた一枚の紙切れ、そこに書かれた楽しい文とイラストが朝の眠気を覚ましてくれました。そういえばあなたは、小さい時から、奇想天外なやり

方で、私達を何度か楽しませてくれたものでしたね。

予備校時代

桜の蕾もふくらみかけた昭和六十一年四月、予備校生としての新しい生活がスタートしました。学生服に〝さよなら〟をしたせいか、ちょっと大人っぽく見えてきたあなたに、健康に注意し、自分の目標に向かって一日一日を大切に過ごして欲しいと願っていました。新緑のまぶしい五月、予備校生も板に付き、五月晴れの空のようにあなたの目が輝いていたのを覚えています。この爽やかな五月十三日はあなたの十九歳の誕生日でした。

この年の四月十六日、運転免許取得。普通の人より早く免許が取れて、運転に対する自分の腕を過信すぎていたことが、今回の事故の要因の一つにつながったのではないでしょうか。運転免許証、これは、大変便利なものであるが、一つ間

違えば一瞬にして人の尊い命を奪ってしまう、恐ろしい武器に変身します。

又、予備校時代の最大の思い出は、八月の長岡祭に友人と一緒に富田勲の〝音と光りのファンタジー〟を見に行き、すごく感動して帰ってきたことです。うんわるくあの日は雨が降っていたものの、どんなに素晴しい演奏だったのか、雨に濡れた洋服を着替えようともせず、その素晴しさを私に立て続けに話してくれました。シンセサイザーに熱中していたあなたにとって、この花火とシンセサイザーの競演は、又とないチャンスであり、あなたの心を完全に魅了してしまった。この興奮は、しばらく続きました、勉強の合間にあなたの部屋から聞こえていた、あのシンセサイザーの美しい音色が、今でも私の耳から離れません。

予備校生活も半ばを過ぎ、受験生の二人の親となった私は、あなたの受験には何一つ心配はなかったが、千鶴の体調の悪さに受験戦争の親の苦しみを初めて嫌という程知らされ、私の目は完全に千鶴に注がれていました。

勉強をして、食べて寝ての繰り返しのスポーツの時間のない予備校時代に、あ

なたの体重は五キロも増え、細身の体に貫禄がついてきました。

受験も間近かになった頃、あなたは突然、国立大ではなく私立大へ行きたいと、私にこっそり話したことがありました。しかし予備校で国立の理系クラスにいたあなたは、予定通り国立と私立の両方を受験することにしたのでした。

長いようで短かかった一年間、アッと思う間に受験シーズンになっていました。私立の受験では、東京の義理の姉宅や、神奈川の私の実弟宅でお世話になり、その時ごちそうになった苺大福が、どんなにお美味しかったのか、私達に笑顔で話してくれたあの時の姿が、目に浮かんできます。

自分の納得のいく点数を取った共通一次、そして二次試験の長岡技科大の二日間の試験も終わり、あなたの長かった受験戦争は終わりました。手足を延ばして、思い切り好きなだけ眠ることも出来、好きなだけシンセサイザーに首ったけになることも出来ました。

迷いの中での決意

私立の発表が始まり、四通の合格通知を手にしたあなたは、国立の発表を前にして、私立大の入学手続きに一人で上京し、鯨荘という一風変わった名前のアパートまで契約して、昭和六十二年三月十四日帰宅。丁度その日は、長岡技科大の合格発表の日であり、千鶴の卒業式の日でもありました。

家に居た主人が、お昼のニュースで張り出された合格者名に、あなたの名前を見つけ一人で喜んでいました。玄関迄、私と千鶴を迎えに出た主人の顔面が、その喜びを物語っていた。新潟駅迄、あなたを迎えに出かけた私達は、「洋行、技科大合格おめでとう」でもその時あなたが複雑な顔をしていたのを覚えています。一浪迄して目指した長岡技科大に合格した事は、確かに嬉しい筈である。それなのに、はしゃいで喜こんでいるのは、むしろ親の方ではなかったのか。

その日の夕刊に、長岡技科大、そしてその下に上越教育大の合格者名が載っていました。去年は二人して仲良く不合格だったあなたと友人が一浪迄して得た勝利の栄冠、こんな嬉しい事はなかった筈だったのに……。

そして、私立大に心変わりしたあなたと、国立大を勧める主人との、背中合わせの毎日が続いたのでした。

確かに、誰が考えても、長岡技科大を捨てる事は勿体無い話である。主人だけでなく、誰もがあなたに国立大を勧めました。しかし、私立大の手続きを終え、アパート迄決めてきたあなたも、自分の意志を主張し、一歩も譲ろうとはしませんでした。ただ、私と祖母だけが、あなたに、自分の進路は自分で決めて、悔いの残らぬようにと助言したのでした。正直言って、私の心中は、二つの大学とも強い未練がありました。私立大は、私の弟の母校であり、又あなたが去年に引き続き今年も合格した大学である。そして又、長岡技科大は一浪迄して得た合格のキップである。

悩み続けたあなたは、結局、国立大に決め、主人を安心させました。しかしあなたの心の中がどんなに複雑であったか、私には理解出来ました。

記念樹

昭和六十二年三月、合格報告に予備校に出かけたあなたは、一本の桜の木を持って意気揚揚と帰ってきた。細くて小さな木には、葉や花になる小さな芽がたくさんついていました。

「これ合格祝いだって、まだいっぱいあったよ」

「あら、桜の木じゃない、予備校もなかなかやるわね。グッドアイデアだわ」

「今年、花が咲くかなあ……」

「花の芽らしいのが三個あるから、三輪の花が咲くんじゃない」

この桜の木は庭の片隅のグミの木の横に祖母が植えてくれました。その年の四

月の下旬頃、思った通り薄ピンクの桜の花が三輪、あなたの合格を祝ってくれるように咲いてくれました。何時だったかあなたが帰ってきた時、満足そうにその桜の花を見ていた姿が思い出されます。

次の年（洋行が亡くなった年）も数輪の花を咲かせてくれた桜の木が、今は悲しい思い出の記念樹となってしまいました。あなたが私達に残していってくれた桜の木は、毎年、同じ頃、美しい花を咲かせてくれるであろう。その度に、十九の春に酔いしれていたあの頃のあなたの笑顔が、私の脳裏に浮かぶことでしょう。

平成元年二月七日、片隅に植えられていた桜の木は庭師の西脇さんの手によって陽当たりのいい一等地に植え替えられました。この木は私達の家族にとって、どんな物にもかえられないあなたの形見の宝石でした。

三月十六日、胸の詰まる様な技大合格発表の日、私は、まだ小さな芽を出したばかりの桜の木を眺めながら、二年前を思い出していました。

技科大一年生

昭和六十二年四月、入学式を目前に控えたあなたは、晴れの日の為に、背広、ワイシャツ、ネクタイを新調、又アパート生活での日用品の準備に追われていました。親許から離れ、生まれて初めて経験するアパート生活に、数え切れない夢を抱いていたことでしょう。

入学式の日、運悪くあなたと千鶴の入学式が重なってしまい、私は後髪を引かれる思いで千鶴の方に出席しました。

「技科大の卒業式の時は、絶対に私が出席するからね」ってあんなに約束したのに……。

あなたの新しい生活がスタートした時、私と千鶴は何か気が抜けた様に淋しかった。いつも三人一緒で食べていた夕食、いつもの席にあなたが居ない。それに

慣れる迄には、時間がかかったけれど、休みになるとあなたは元気に帰って着てくれました。高速を使えば一時間ちょっとの距離ですもの。

あなたが帰って来てくれた日は、あなたの好物が食卓を飾り、夜遅く迄、あなたを中心に家族四人の笑いが尽きなかった。あの幸せな一時を、私は今迄当然のように思っていました。

日曜の夜、サラダやおから、ひじきの煮物等タッパに入れてもたせ、玄関の外迄私達はあなたを見送りました。シートベルトを着けたあなたに、

「気を付けて運転してね」

「うん、わかったよ」

白い車の中のあなたは、私達にVサインを残して長岡に向けてスーッと走り去った。あなたがアパートに着く迄、私はいつも事故に合わなければよいがと、時計を見ながら心配していました。

昭和六十二年四月、あなたは自動車部に入部、これがあなたの運命を確実に死

に一歩一歩近づけた事になる。大学に入学すると同時に、あなたは中古の赤いファミリアを買って貰い、若葉マークも取れ、運転に対する注意力が薄れ、一番危険な時でもありました。何度も気を付けるように注意すると、

「お母さんは心配性だなあ、大丈夫だって」と言うのがあなたの口癖でした。自動車部に入部してからは、私の心配が綿菓子のように膨れあがったのでした。

今考えてみると、一つハンドル操作を誤れば死に連がる危険な悪路走行練習に、私は何故早く気が付かなかったのだろうか。ラリー練習の危険性をあなたに助言してあげてたらと、自責の思いに悩み続けました。

あなたは、自動車部員の一人として、去年そして今年に続き、連続優勝への夢に青春を賭けたにちがいない。二十一歳という若さがそうさせたのかも知れません。

この年の八月、長岡祭りの時、私達三人は生まれて初めて見る三尺花火に胸を膨らませ、高速道路をあなたのアパートへと急いだあの日の事が、つい昨日の様

に思い出されます。五階の屋上は、夏だというのに涼しくて心地良かった。私達三人はシートに座り、あなたは折り畳みの椅子に座って、お菓子を抓みながら缶ジュースを飲んでいましたね。

私達の他に沢山の人々が、それぞれの輪の中で思い思いに、大空に咲く小さな花、そして大輪の花に歓声をあげ、拍手していました。ちょっとよそ見していると、パッと消えてしまう一瞬の華麗さ、だからこそ人は夏の夜の花火に酔いしれるのでしょう。家族四人で見る三尺花火、あんなに楽しかった思い出を残して、何処を捜してもあなたの姿はもう見られない。命というものは、あの花火の様にパッと消えてしまう儚いものなのでしょうか。

十一月には、新築したばかりのコーポアルファに移り、やっと素敵なあなたのお城が出来て喜んでいた。八畳一間にちょっと大き目のキッチン、バス、トイレ付き、この部屋にあなたの青春を想像していた私だったのに……。このアパートへは千鶴と一緒に二、三度行ったことがありました。

あなたのアルバムの中の数枚の部屋の写真、その中の一枚は、美味しそうなカレーライスが写った写真であった。多分、自分ながら上手に出来た嬉しさのあらわれでしょう。十カ月という短い間とはいえ、この部屋で楽しい学生生活を送っていたにちがいありません。

技科大二年生

昭和六十三年二月、旧ラリー車の白のカローラセダンを購入。先輩と静岡迄、車を取りに出かけた時の写真には、あなたが嬉しそうに写っていました。何時の日だったか私に、

「赤いファミリアの車を売って、ラリー用の車を買うことにしたんだ」と嬉しそうに話した言葉を思い出します。この車は、先輩二人の車と同種のもので、三台の車の写った写真の裏に、〝これはすごーい！三兄弟〟と書いてありました。この

車であなたは、本格的なラリーの練習を始めたのでした。

この年の八月二日～四日迄、第二十七回関東甲信越学生自動車連盟競技大会が宇都宮市周辺、丸和オートランド、日光スピードパークで開催されました。あなたの出場を知った私は、四日の日が終わる迄、事故が起きねばよいがと、落ち着かぬ日を過ごし、競技会を終えて帰って来た時、やっと安堵の胸をなでおろしたのでした。

二年連続総合優勝に輝いた長岡技科大、自動車部員の喜びは、レーシングピープル十月号に掲載されていた。この競技会で、あなたは自分の腕に多少なりとも自信をもったに違いありません。来年も是非優勝したい、その気持ちが安全第一主義を忘れて、競技至上主義、競技成績第一主義に走ってしまったのでした。

競技会を終えて数日後、あなたはお盆の手伝いに佐渡に出かけました。目が回る忙しさの中で、袖を捲り上げ、短パンをはいて汗を拭き拭き、花の配達に走り回っていたあなたの姿が目に浮かんで、胸が詰まる思いです。

八月十七日、私達は三人で午前二時過ぎ出航の臨時便で、新潟に向かっていました。思い切り働いてきた疲れた体に、夜中の海上からの風が清々しかった。特に日本海の船上での夜明けは絵になるほど美しい。その白々と明けていく夜明けを、あなたは甲板でどのような思いで眺めていたのでしょうか。

何処迄も果てしなく続く海原、吸い込まれそうな海、雄大な日本海に囲まれたあなたの生まれ故郷佐渡、幻想的な美しさの中で、これが最後の佐渡であると思ってもみなかったでしょう。

忘れられない言葉

事故の数ヵ月前、洋行が休みで帰ってきた時、車の助手席で、

「ねえ、洋行、自動車部って危ないからやめたら……」と何に気なく言った私に、

「俺から自動車部を取ったら何も残らん」とはっきり言い切った。

「そしたら大学やめて、自動車学校へ行ったら」

「……」

「それは冗談だけど、大学の方も頑張ってね。気を付けて運転しないと駄目だよ」

「分かってるよ、心配性だなあ」

あの時のあなたと私の会話が、つい昨日のように感じられます。

真剣な顔で、はっきりと言い切ったあの言葉にたいして、私は何も言う言葉が無かった。それ程好きな自動車部であったのか……。車が好きで自動車部をやめられなかっただけではない、多分それには、先輩達の強い友情の絆があったからでしょう。自動車部での先輩達との交流が、あなたにとっては一番楽しかったのではなかろうか。自動車部員であることに強い誇りを持っていたのでしょう。

「俺から自動車部をとったら、何も残らん」あの言葉が、いつまでも私の頭から離れない。甘酸っぱい笑みを浮かべている遺影の中のお前に、そんな芯の強さが隠されていたのでしょうか。

最後の夕食

私達が、あなたと会った最後の日は、無線の試験を受ける為に突然帰ってきた、夏休みも終わりに近づいた八月二十七日でした。

「明日、無線の試験なんだ」

「あら、千鶴も試験だから一緒だわね」

「へえ……千鶴も試験か」

「よーし、じゃ洋行の好きなハンバーグと野菜をたっぷり食べさせようかな」

私が夕食の準備を始めた頃、クーラーのきいた客間では、二人とも試験勉強をしていました。やはりあなたが帰ってくると、家の中が明るく賑やかになり、夕食も又一層、美味しかった。しかし、これがあなたとの最後の夕食となってしまったのです。あの時、満足そうに食べていたあなたの姿が思い出される。貝のお

味噌汁を、おかわりしてくれたのに……。

襖に寄りかかり、小さな無線の本を一所懸命見ていたあなた、傍らでは千鶴がテーブルに向かって勉強していました。高校の時から無線の試験を受けようと思いながら、機会を逃がしていただけに、張り切っていたのですね。

「合格通知は何時くるの？」

「九月の初めの頃かなあ」

「そう、頑張りな」

「うん、無線を持ってると自動車部に役立つんだ」

二十八日は、試験が終わるとすぐ長岡へ帰ってしまった。やはり友人といるのが一番楽しかったからでしょう。八月二十八日が、あなたと私達の最後の日となってしまった……。あんなに元気だったのに。人の命は分からないものです。

九月上旬に届いた無線合格通知を手に、飛び上がって喜んでいるあなたの姿が目に浮かぶ。大学祭が終わってから、その葉書を持って帰ってくるつもりであっ

たのでしょう。それなのに数日早く無言の帰宅をしてしまったとは……。
祭壇の前に置かれた無線合格通知が今はたださみしい。

最後の電話

私があなたの声を聞いた最後の電話は、事故の三日前の九月十一日、日曜日でした。

「もしもし、あら、洋行寝てたの」

「うん……」

「お金、大丈夫？　やっていける？」

「うん、大丈夫だ」

「ねえ、洋行の部屋、千鶴と代わってくれない？」

「ああ、いいよ」

「じゃあ、何時帰ってくれるかなあ、荷物持ってもらいたいし」
「うん、今、学園祭前で忙しいから、終わってから帰るよ」
「そう、じゃあ待ってるわね」
学園祭は九月十七、十八日、それが終わってから帰ってくる筈であったのに。運命のいたずらとは、こういうことをいうのでしょうか。
千鶴の部屋が狭かったので、あなたの部屋と代わってもらおうと思って電話をかけたのが、あなたの声を聞いた最後となろうとは……。あの時のあなたの声がはっきりと脳裏に焼き付いて離れない。ちょっと眠そうなあの声が忘れられません。
「私、狭くてもこの部屋でいいから、お兄ちゃんの部屋はこのままにしておこうよ」
私も千鶴と同じ気持ちであった。部屋を取り替える気持ちはなくなっていました。あなたの部屋は、あなたの思い出として大切にとっておきたい。何時か「ただ

いま」と言って帰ってくれる日迄……。